

貨幣史研究会（東日本部会）第12回
平成15年3月27日（木）13:30～17:00

<出席者>

座長：田代 和生・慶應大学教授

※鈴木公雄・慶應義塾大学教授欠席のため、鈴木教授により依頼

報告：脇田 晴子・滋賀県立大学教授

コメント：田中 浩司・函館大学助教授

山内 晋次・大阪大学講師

その他の参加者（五十音順）：

井上 正夫・東アジア経済史研究者

井原今朝男・国立歴史民俗博物館教授

大久保 隆・同志社大学教授

黒田 明伸・東京大学教授

中島 圭一・慶應義塾大学助教授

橋本 雄・九州国立博物館設立準備室研究員

研究報告ならびに討議の様相（文中敬称略）

脇田晴子 「日本中世貨幣史の二、三の問題」

（報告は別添1レジュメに沿って行われたため、報告の詳細は別添1参照のこと。）

<皇朝十二銭の効用>

貨幣変遷・貨幣の効用について基本的な問題として、貨幣の換算価値・基準貨幣について取り上げることができる。皇朝十二銭は物々交換の基準として平安中後期まで機能していたと考える。

栄原氏の、素材価値と信用価値の差額を国家が取るという説については疑問。官位制と同じく統一基準が経済にも必要であり、税の徴収の物々交換の基準のため貨幣を作った。この時期の貨幣は税制などをはじめとする官司の統一基準だろうと考えている。

史料3は、10世紀後半に尾張国司が価格の差を利用して、私欲を謀るという例である。政府の定めた估価法には依らず、国衙内部における估価法と時価の差を利用して、国司が何倍かの利益を得るといえるものである。また史料からは、絹の上品と下品による値開きの差が大きく、品質による価値の相違が明確となっていることも明らかとなり、貢納生産品とは異なる商品経済の発展の局面を見出すことができる。このような特産物市場の形成とそれに伴う在地の交換経済の中で、貨幣の必要性が強化されたのである。平安期になり、皇朝十二銭の流通が停滞したといわれる時代に、封戸物納入の際の基準貨幣、換算基準として銭の役割は高まったと考える（脇田1969）。

以上のように平安期には納税の際、品質による値段の差を貨幣で換算し、他の物資に代えてその代物を弁済することが行われていた。その換算基準としてお金を使ったのであり、皇朝十二銭は交換基準として重要であった。

<中世日明貿易の輸入貨幣の政治性と経済性>

佐藤進一氏は、将軍による日明貿易での明銭の輸入について、貨幣輸入権を一手に握った将軍は、貨幣発行権をもったことになるかと主張された。批判も出されているが、基本的に佐藤氏の考え方を支持する（佐藤 1963）。日本では鎌倉時代以来、輸入銭貨に頼り恒常的なデフレ現象にあったと思われる。そこへ独占貿易の輸入制銭を基準貨幣とし、幕府御用の特定金融業者を通じて市場に投入すると、市場操作や統制面で大きな効果をもったと考えざるを得ない。幕府による貿易独占は、京都を核とする求心的な経済構造を、特権商人を通じて強化する上で、大きな意義があった。その効果の重要な部分を銅銭輸入が占めていた。

なぜ幕府は、銅銭を中国に頼って輸入したかについて考えるとまず、なぜ日本通貨を発行しなかったのかという問題になる。高度な技術を要する鋳造物は多く作られており、技術が無かったとは言い難い。鋳造コストを検討しても、輸入の方が有利とは考えられず、鋳造・発行する方が有利である。

義満が貨幣を発行しなかった理由については、一つは政治的な問題で、名目的な主権者が天皇で、貨幣発行権が天皇にあったためではないか。もう一つの理由は経済的事情であり、自鋳しても信用貨幣として通用しない国家権力の商業掌握度の問題であろう。信用貨幣を流通させ得る権力は、国内の流通経済を掌握し、国家規模での自給圏の上に立つような経済の独自性をもったものであろう。また宋銭・明銭・私鋳銭が入り乱れ、経済界は混乱し「撰銭」が行われ、16世紀には幕府も大名も禁止するが、成功しない。これは、悪貨が信用貨幣として良貨なみに通用するだけの条件がなかったことを示している（脇田 1976、1985、1992）。

<「撰銭」と「撰銭禁制」と市場構造>

撰銭は貨幣制度が混乱するといつでも起こる問題であり、中国では15世紀半ば、日本ではすでに13世紀半ばにみられたという説があるが、中国でももっと早くからあったのではないかと。私鋳銭は中国、朝鮮、日本それぞれでみられる。永楽銭は、勘合貿易による明制銭だけではなく、模鋳銭もあったのではないかと。撰銭令・撰銭禁制を見ていくと、その意義は統一権力たりえぬ地域（大名）権力の、貨幣統一化できない応急の貨幣政策と考えることができる。「中銭つり上げ令」は、日本での私鋳銭である中銭を信用貨幣として流通させることを狙いとし、それによりインフレ効果と景気上昇を期待した政策。また、中銭と善銭の含有率規定は流通貨幣の均質化を図ったものである。信長は畿内の相場に順応した撰銭令を出している。東国大名の貨幣政策は撰銭禁令より発展し、悪銭の使用を禁止し、永楽銭のみの通用を命じている。

<「撰銭禁制」段階の貨幣流通状況と埋蔵銭>

中世は、米より貨幣の運送費が高く、現物貨幣は使われていなかったと考える。銭は実際には非常に重く持ち運びが不便であったため、貨幣は決済の基準として利用されていたのであろう。埋蔵貨幣は為替発行の裏付けとして保有されていたものが忘れられたということではないか。また徳政令の影響で土倉の信用が無くなり、タンス預金化したものもあるであろう。

撰銭令で銭各種の割合を示してあるのは、緞を作る金融業者にその割合を提示したもの

ではないか。埋蔵銭と私鑄銭の問題は、一乗谷出土銭は埋蔵銭ではなく通用銭が戦乱で埋められたものと思われるが、きれいな宋銭が多いということであり、今後の考古学の成果や分析を期待したい。

— . — . —

<脇田報告へのコメント（山内晋次）>

* コメントの詳細は別添2参照。

平安末期の貿易史について、「平氏政権による積極的な貿易政策が実施された」、また「日宋貿易で重要輸出品が金であった」という通説的イメージがあるが、それが妥当かどうかを検討していく。

平氏政権の外交・貿易政策に関する通説の根拠史料の解釈に疑問の余地がある。例えば平氏の大宰府支配が貿易独占支配を企図していたという通説がある。しかし、大宰府の史料には、平氏が確実に貿易に関与し、そこから収入を得ていたという史料はない。これまでの日本史の研究では、説明がつかない部分を貿易で説明しようとする傾向がある。平氏が大宰府に関与していた事実と貿易とはもう少し冷静に考え直す必要がある。また「日本商人」＝「日本人」の商人、「日本出身」の商人と考え、それを平氏政権と結び付ける理解も疑問であり、平氏政権と貿易については再検討する必要がある。

また、日宋貿易における日本金輸出の通説的イメージも疑問点が多い。例えば、中国で日本金の流入が注目されるのは12世紀後半南宋以降であり、唐末～北宋期の日本金流出については過大評価がされている。また金だけではなく、他の輸出品も大量にあった。

宋銭流入の理由や状況をめぐり諸説あるが、最近では、宋銭は貿易決済通貨ではなく、輸入ピークは13世紀であるという流れになっており、それはその通りだろう。ただし、宋銭の流入・流通の本格的開始時期は12世紀半ばごろからの平氏政権期からであり、そのズレをどのように考えるかは、検討しなければならない。

また、平氏政権が宋銭流通を容認したかどうか説が分かれている。両説とも平氏政権の積極的な貿易関与が前提とされているようだが、この前提が否定された場合どうなるかも検討する必要があるのではないか。

平氏政権の貿易については、史料の限界の突破をどのようにしていくかが課題。また、日宋貿易における金の問題に関しても東南アジアなども視野に入れ、もう少し緻密に検討する必要がある。

<脇田報告へのコメント（田中）>

* コメントの詳細は別添3参照。

皇朝十二銭については、統一基準としての銭の成立時期・理由・条件を考える必要がある。「新銭が旧銭の10倍通用していた」とすると、銭銘は意識されなかったのかが疑問。『平安遺文』を検討していくと、次の新銭発行までは、新銭・旧銭の区別意識があることがわかる。新銭が発行されることにより、従来銭は古銭になるのであろう。

宋銭の流入以降、皇朝銭も混在して流通し、すべての皇朝銭が「古銭」になり、宋銭が十分な量が輸入された時点で、銭1枚＝1文という関係が成立した。宋銭流通は、国家的な承認というよりは、宋銭の流入に関わった人々やその利便性を認めた人により生じてきたのではないか。

日明貿易の輸入貨幣については、貿易権掌握というレベルでは明銭輸入が当時の貨幣発

行の一翼を担っていたが、貿易主体からみれば将軍による完全掌握ではない。15世紀段階に幕府が明銭に独自の信用を付与した形跡はない。もし、独自の信用を付与できたならば、自鑄することもできたであろう。また幕府による市場操作や統制の可能性を考えていくと、永楽銭などの明銭を区別・意識するのは、おおむね16世紀段階だろう。

「撰銭」は貨幣制度の混乱ではなく、銭自体の瑕疵などが問題でおこるのが原初的ではないか。また撰銭禁制は、形態的に何らの瑕疵のある銭の排除と、永楽銭などの強制使用・混用、撰銭による物価騰貴規制といった趣旨に分類することができるだろう。

撰銭禁制段階の貨幣流通状況を検討すると、報告にあった銭の持ち運びの不便さについては、史料によれば銭の確実な移動が見られる。為替についても16世紀には衰退していく。また緡は幕府の御用金融業者だけではなく、京都の真珠庵のような寺院なども扱っていた可能性がある。

(脇田) 山内氏のコメントについて、平家が貿易に干渉していないのではないかという点であるが、当時は船が港に入ると停泊料を取るの、日明貿易のように幕府が主体にならなくても、間接貿易収益があるのではないか。不確実な面はあるが、平家は貿易に干渉していたといえるのではないか。平家が干渉しないで、宋銭が入ってくるルートがあったのかどうか問題。

田中氏のコメントで皇朝十二銭の銭銘の件については、これは朝廷の史料であるので、その時の基準銭が当時出た銭か古銭かは暗黙の了解があったのであろう。

日明貿易の輸入貨幣のところであるが、善銭として撰銭令の時に規定されるような制銭を新たに輸入して足利幕府が握る。将軍がもらう分なので、勘合貿易では一般には流入しない。そのため佐々木・田中説の可能性は少ないのではないか。

(田中) 幕府が市場に投入し、明の制銭として受け入れられたことは確かであるが、永楽通宝は市場から拒否を受け、撰銭禁令が出た。

(脇田) 制銭の永楽通宝とそうでない永楽通宝の違いは、当時の人が見ればわかったのであろう。善銭・中銭・悪銭があり、中銭を善銭並みに通用させ、中国からきた銭は善銭であった。「地銭のうち、よき永楽」といわれるような私鑄銭としての永楽銭が問題である。

(田中) 制銭を幕府が放出するとしても、幕府としての不利益は生じない。

(脇田) 明の制銭が入るのは義満の時に、明の制銭だけが善銭として流通している。撰銭が社会問題化するのは15世紀末以降であり、その時期になると善銭に対し、私鑄銭の永楽銭が善銭なみに流通させられる。その二つを正当な流通銭として認定するのである。また後北条氏領国で流通している悪い永楽とは全く異なる。畿内と後北条氏領国でも違う。

(田代) タイムラグや地域による差があるということである。日明貿易が始まった頃の話と永楽通宝の模造銭が出回る時の話など、時間的なことに注意しなければならない。

(田中) 幕府にとって中銭つり上げ令は良かったのか。

(脇田) 幕府が中銭を作っていれば利益があがる。貨幣量を増やすのに、幕府が鑄造したか否かに関わらず、中銭、私鑄銭の永楽通宝を公認の制銭と一緒にさせるのは、貨幣不足を補いインフレ効果を持つ。

- (田中) 幕府の倉の中に明銭の制銭があるということか。
- (脇田) それは無いので新規に作って出す。各大名の撰銭禁令も物価騰貴の抑制策ではなく、物価を上昇させ、景気を良くすることを考えており、その結果近隣の商人も来る。ただ、善銭を持って帰られると困るので、私鑄銭を出す。
- (中島) 報告にあった「切銭」は、保立氏が、銭ではなく為替のことであるとしている。
私鑄銭に過大な期待を持ってない。鑄型は、博多でも2つしか出土しておらず、京都も駅周辺のみ、鎌倉も1つの出土である。今のところ、出土数が多いのは堺だけであり、14、15世紀段階で、日本でそれほど私鑄銭が作られていたかは疑問。出土した銭を見て、考古専門の人はある程度区別がつくということだが、判断基準ははっきりしない。当時の一般の人が区別していたかどうか疑問が残る。また量の面でも私鑄銭はそれほど多くない。
- (脇田) では「中銭つり上げ令」(別添1 3ページ)の中銭は何になるか。
- (中島) 私は藤田五郎氏が間違っていると考えているので、前提が異なる。
- (井上) 日宋貿易について、全体として輸出品の中心は硫黄・材木だと考えるが、しかし宋銭の流入に関する限り、やはり砂金は輸出品として重要である。宋銭は持ち出し禁止であるので、常に宋銭授受は密貿易の世界でしかありえない。その場合、硫黄などと比べ金であれば密貿易が容易である。
- (田代) 密貿易であるということから、砂金を史料で押さえるのは難しいということになるか。
- (井上) 役人が関与していても、公式文書には絶対出て来ないであろう。
- (井原) 『権記』には中国商人が金を求めた記事が出てくる。
- (田代) むしろ博多あたりでは他の中国人の目にさらされ、まずいので瀬戸内海経由で来るのか。
- (脇田) 『小右記』によると藤原実資は、高田牧に来る貿易船により、日宋貿易で利益をあげている。
- (山内) 高田牧の所在地は不明だが、そこで貿易が行われていたということについて私見では否定している。森克己氏以来の通説であるが、最近はそれを否定する流れになってきている。
- (橋本) 義満の日明貿易の内容は実際には不詳である。様々なルートの一つには、同じ船に義満が把握しきれていない貿易商人が乗っていることである。それを果たして独占といえるかどうか。銭以外の貿易品は全くわからず、また参加した守護大名や貿易商人も不明である。
- (脇田) 義満の時代は義満だけではないか。
- (橋本) それが通説だが、典拠はない。
- (田代) 将軍の専売品の銭はいいが、他はだめという禁止の史料はない。
- (橋本) 史料もなく、またこの時期の遣明船は3隻でなく6隻程度行っている。義満に全てを経営できたか甚だ疑問。佐藤氏がいう独占「的」貿易という表現の「的」の含みを重視すべき。
- (黒田) 永楽銭は中国銭の歴史の中でそれほど多く出された銅銭ではない。ところが日本

での出土量は6位と多く、中国ではあまり出されていないことから、ほとんど日本に流入したのではないかという推測がなされている。1480年に北京で新しい銭が突然入ってくるという史料がある。そこで北京の人々は洪武銭と永楽銭を貯め込んで使わないか、2倍・3倍などと高く評価し使っているという史料が出てくる。鑄造数が非常に少ない割には、史料に出てくるので輸出用に作ったというようなことはありえない。日本で出土する渡来銭の量は中国での鑄造量と比例しているが、永楽だけは多い。

(中島) 北宋銭の鑄型はあるが、永楽銭はない。

(黒田) 発行量の少ない永楽通宝が悪銭であるわけがなく、8割は銅である。それよりも低い銭があるとすれば、怪しいもの。

(中島) 出土する永楽銭は、考古学の人によると、鑄あがりが高くしっかりできたものであり、他の銭との区別がすぐできる。私鑄銭の永楽銭はほとんどなく、良いものしかない。

(脇田) 寛永に出された「鳴海氏由緒書」には義持の時以来、銭座奉行として永楽銭を鑄造したという史料がある。

(黒田) 良い永楽銭が私鑄されていたとしても不思議はないが、永楽銭の出土量は非常に不思議である。

(中島) 出土銭の質はいいが、史料での評価は悪い。見た目と実際の通用価値は別のものとして考えなければならない。

(黒田) 脇田氏のレジュメ2ページ、楠葉西忍の史料だが、北京・南京など各地の銭の種類は違う銭と考えた方がいい。少し時代は下り16世紀だが、福建省・浙江省などで出てくる銀と銭の相場が安定的なのは1両が大体600文～700文である。それと比べこの史料では、銭が低いので、2貫文・3貫文というのは悪銭の相場とみていいだろう。逆にいうと北京と南方では差ができていているという証拠になる。

(脇田) 西忍は同じような銭と考えている。銀を北京ではなく寧波で換えると得であるという書き方をしている。

(黒田) この史料の時期が1505年であるが、北京で変った銭が入ってきたのが1480年で、いい銭を2文、悪い銭を1文とする風習が出てきたと言われる。その後200年間そのような風習が北部で残るが、その20年ほど後に南部でも同じ風習が広がってきている。それと、悪銭1枚が0.5文となっているという時期がぴったりくる。東シナ海共通のこととして、この時期に何かがあったということはいえそうである。

(脇田) ただ、この史料は西忍が後年語っているものである。

(橋本) 1485年の船であればちょうど良いが、もう一つ前かもしれない。

※最後の議論につき、後日黒田・橋本両氏から以下の連絡が参加メンバーにあった。

<黒田 明伸・東京大学教授からの連絡>

昨日は、脇田さんの含蓄深いご報告ならびに皆様からの興味深いご意見、大変に勉強させていただきました。ところで、楠葉西忍の「銀10文目、北京＝銭1貫文、寧波＝銭3貫文」「日本＝銭1162～文」の談につき、「北京は銭ストックが大きいので銭

安で当然」などと逆の間違った発言をしてしまいました。この情報は重要なものと思いますので、お詫びかたがた、追加的コメントをさせていただきます。

この史料は、北京が錢安ではなく、とんでもない錢高であったことを示しています。しかし、15世紀を通じて、中国の鑄錢はほぼ、北京の戸部、工部所属の宝源局、宝泉局のみが鑄造していましたので、錢公式供給が北京にかたよったことは間違いなく、それで上記のような勘違いの発言をしてしまいました（ただし南京でも鑄造された）。昨日、紹介させていただきましたように、1460年代から1480年のあたりに、北京に私鑄錢が流入しはじめたことは、史料が物語るところであります。北京と寧波の錢そのものの質に差がなく、楠葉の談が1480年より前の状況を語ったものだとすると、これはきわめて貴重な情報となります。なぜなら、これだけの格差は17世紀末以降では、二度と現れなかったほど大きなものといえますし、中国東南部の方から銅錢を大量に私鑄して北京に持ち込む動きが生じるのは必然だからです。明代中期で、なぜ福建の私鑄錢が、南中国よりも輸送費のかかる北京で最初に問題になるのか、私はうまく説明できずにいましたが、これで解けたこととなります。また、北京方面の錢高を誘因として、福建で私鑄錢の大量生産が始まったのだとしても、海上輸送される時に、もう一つの錢高地域である西日本へもそれが向かうことは、航路からしても、極めて自然です。15世紀末に、北京付近と九州でほぼ同時に撰錢が問題となることも、やはりなんら不思議ではなかったこととなります。

では、なぜこれほどの錢相場の地域差が現れたのか、がもちろん肝要なところです。私の書いたものをお読みいただいた方であれば、銅錢のような小額通貨の需給に地域的偏差が生じるのはむしろ当然だと思えると思います。しかし、その私でもこの格差は、事実だとすると、大きすぎるようにみえました。清代でも、北京の周辺地域より北京城内の方の錢相場が高くそのため錢を城内に運ぶという傾向はあったようです。官僚機構と兵士への俸給支払いには膨大な銅錢が必要ですので、その需要の強さが鑄造地であるという供給上の優位さを上回ってしまうからです（ただし18世紀では逆に北京から流出する）。しかし、これほどの格差が生じたのは15世紀の歴史的条件によるものはずです。

北京に近い北方戦線での軍需関連の銅錢支給が膨れ上がるにもかかわらず、大規模な銅錢鑄造ができずにいたことが、こうした事態を生じせしめたと考えられますが、きちんと検討してみなければなりません。

脇田さんのご報告にありましたように、日本の原銅輸出が、通時的なものではなく、この状況からそう遠くない1432年にはじまるということも、上記の事情との関連で興味深く思えてきました。

はたして楠葉の談が何年の頃の事情を反映したとみたらよいのか、ご知見をおもちの方がいらっしゃいましたら、ご教示いただければ幸いです。

<橋本 雄・九州国立博物館設立準備室研究員からの連絡>

楠葉西忍ですが、まず、参加したのは永享4年（1432）（足利義教2回目）と宝徳2年（1453）（足利義政初回）の2回でした。2～3回、1485年かもしれない、と申ししてしまいましたが、ここに訂正させていただきます。

西忍については、国史大辞典に立項されているので、概略はつかめます。専論として、田中健夫先生の『中世海外交渉史の研究』（東京大学出版会、1959）所収論文が大変詳しいので、是非ご参照ください。

問題は、西忍の談話がいつの段階の中国の様子を著したものか、という点ですが、（素直に考えれば）やはり遣明船参加時の 15 世紀前半～中葉と考えるのが妥当かと思われま

す。ただし、その後の遣明船参加者から西忍が得た情報が含まれている可能性も含めまして、もう少し検討してみたいと思います。

.....

最近の論稿で、先日の脇田晴子先生のご報告と密接に関連するものがありましたのでご紹介致します。

○中島楽章「永楽年間の日明朝貢貿易」『史淵』140 輯、2003 年 3 月。

永楽年間の日明貿易の実態を示す『敬止録』貢市考（『北京図書館古籍叢刊』28）を用いて、朝貢・回賜関係以外には実態不明であった同時期（15 世紀初頭）の貿易——日本輸出品（中国輸入品）の種類——を紹介した物です。

ここで、明向けの日本銅輸出が（従来説の宣徳年間から）15 世紀初期まで遡ることが明らかにされており、日明貿易研究史上、これは大きな成果と思われま

す。（ただしその輸出の規模はあまり握りませんが……）
またこのほか、朝鮮・南方産品の日本輸出品（再輸出品）の問題などにも関説しており、貨幣に止まらぬ内容ですが参考になると思います。

以 上